

奈良 勲 編集

『理学療法のとらえかた PART2 —Clinical Reasoning』

鶴見隆正

(神奈川県立保健福祉大学)

クライアントの運動機能や生活を支える理学療法は、実に奥深く、やりがいと可能性を秘めていることに高ぶりを感じ、いかに「臨床力」が大切かを考えさせられた、というのが本書の通読感である。

これまでの理学療法に関する書籍は、どちらかというと技術的なものが多く出版されてきた背景には、急速に増大する理学療法ニーズにより適切で効果的な方法を、広く普及する狙いが少なからずあったと思われる。事実、筋力や疾患に対する運動機能の評価法に関するもの、疾患群別の運動療法のあり方、技術的なものが漸増的に出版され、理学療法の発展に寄与してきたことは否めない。しかしながら、あまりにも定性的な評価尺度やその結果に従った理学療法技術の拡がりはややもすればパターン化したアプローチに陥りやすく、創造性に危惧を感じることも少なくない。

本来、個別的で効果的な理学療法とは、クライアントの抱える多様な身体症状、心理面、社会的背景などの諸問題を如何に総合的に捉えたうえで、適切なアプローチを具体化するかである。これまで理学療法過程については学内教育で教授されていたものの、そのプロセスのみが際立ち、肝心な問題点の解釈や臨床判断のあり方などについて説得力のある提示が少なく、臨床現場においては理学療法のとらえ方はどうあるべき

か悩むことが多かった。本書は、その悩みに確実に応えることを目的に企画されたものと読みとることができる。「理学療法のとらえかた」に真正面から切り込んでおり、臨床現場にいる理学療法士にとって心強いヒントが網羅されている。それを可能にしたのは、臨床・教育領域の最前線で活躍されている経験豊富な30名の執筆者の人選であり、彼らの臨床センスの高さが伝わってくる。

本書は、好評であった『理学療法のとらえかた—Clinical Reasoning』(文光堂, 2001)の続編であるが、今回の特徴は理学療法マインドを機軸にクライアントとその家族のニーズ、さらに人の生活行動を左右する社会構成までを視野に入れた理学療法のとらえ方、さらにそれらを具現化するための方略について具体的な事例や事象を提示し、「なぜ」「どうすれば」という問いかけを加えている点が読み手の科学的興味を刺激する。行間からは理学療法のエビデンスを集めたり、検索するのではなく眼前のクライアントから見出すことの重要性がにじみ出ている。まさに理学療法士はサイエンスとアートとの融合を図りながら、クライアントのニーズに的確に応え得る臨床力へと成長せねばならないと痛感する。

本書は、新しい観点やアプローチを模索している若い理学療法士から指導的立場のベテラン理学療法士に一読していただき、日々の臨床課題を「なぜ、どうしてだろう」とスタッフ間で熱いディスカッションを交わし、臨床力を高め合うヒントが込められた書で、ぜひ推薦したい。

●B5判 348頁 2色刷

定価(本体4,800円+税)

2003年9月 文光堂・刊